

求

道

第拾四卷
第五號

十 月 號

■善惡貧富と絶對救濟

■絶對不二の教機——「正信偈」講話

■是の心顛倒せず

大正七年三月八日第三種郵便物認可
大正七年十月十五日發行（毎月一回十五日發行）

善惡貧富と絶對救濟

二

○吾人日常の生活に於て、常に吾人の腦裡を去ることの出來ぬものは、善惡の觀念である。倫理道德の意味に於ける善惡を初めとして、是非善惡の沙汰に至るまで、よしあしの言語を離れて思想を言ひ顯すことの出來ぬほど肝要なる考である。而も其善惡を判断するには、何人も自己中心で考へるものである。而して自分では公平正義のつもりである。是に於て益々是非善惡が紛雜する様になる。何人も是を是とし、非を非とするつもりであるが、本來是と認め非と認むるものは自己中心である。此に於てや是非善惡が分からぬ様になる。人皆心あり、心各執る所あり、彼是なるときは、我非なり、我是なるときは彼非なり、我必しも聖に非ず、彼必しも愚に非ず、共に是れ凡夫のみとの金言を服膺せねばならぬ。是非しらぬ、邪正もわかぬこのみなりと

か、善惡の二つ總してもて存知せざるなりとかの聖人の教訓は、千古不磨の眞理と鑽仰せねばならぬ。○此の如く倫理道德を初めとして、日常生活に至るまで、一言一行、據て以て判断せんとする、是非善惡の標準が狂ふて來ては大恐慌たらざるを得ぬ。此に於て眞實の求道者は行き當らざるを得ぬ。兎角、世の信者なるものが、此點に於て十分解決を得て居るものが少い。抑々親鸞聖人の眞宗に於て、最も著しき點は、此問題を解決したところである。特に歎異鈔の始終を通して、問題の中心となりたるものは是である。

○第一章に『彌陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとすべし、そのゆへは罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします、しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらぬといふことと終りてある。悪い儘や、かまはぬて安心出來れば結構であるが、夫ては道義の關門は通られぬ。又常識判断の是非善惡に歸り來らねばならぬ。世の所謂信者なるものが、他人に對する是非善惡の沙汰に於ては、毫も未信者と選ぶことのなきのみならず、甚しきに至りては惡をもおそるべからずを誤用して、自己を辯護するの具となす傾がある。亦之を非難する嚴格論者は、我は正義なりとして知らず識らずの間に、善惡の沙汰の頂上に坐りて居る。

ず、念佛にまざるべき善なきゆへに、惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへに』を初めとして、第二章、三章、十三章、及結文に至るまで、彌陀の本願の絶對救濟を以て、一點の餘地なく解決したまひてある。歎異鈔同意味の口傳鈔に於ける聖人の自督を拜誦するときは、かくまでも徹底したる信仰を人生に持來されたる聖人の眞宗を仰がすには居られぬ。曰く『聖人親鸞のたまはく、某は善もほしからず、また惡も恐れなし、善のほしからざるは如來の本願にまされる善なきゆへに。惡のおそれなしといふは、如來の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへに』と。

○歎異鈔を繙くほどのものは、何人も善惡の二者の判断すべからざる底の行き當りまでは達して居るが、行き當りたぎりである、行當りて止りて居る。此點を通じて居らぬ、所謂徹底して居らぬ、行き當りた儘の信仰が多い。所課悪い儘とか、善くても悪くてもかまは

○抑々歎異鈔の惡をおそるべからずといふ意義は、心配するなどの意である。汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、すべて水火の難に墮せんことを畏れざれと同意である。寧ろ善惡の問題につきて心配するものに向て親切なる親心である。闇夜に燈の有無を沙汰せなとか、電燈と提燈との區別ないとか言ふても、夫は空論である。一たび夜が明け太陽輝きてこそ、他の燈も要にあらず、闇をも畏るべからずといふことが

出来る。特に彌陀の本願をさまざまの悪なきがゆへにといふは、日輪をさまざまの闇なきがゆへにと同様である。本願といへる佛日が瞳々として四天下を照すときは、所謂内外明闇を簡はず、如來眞實の光明に照耀さるゝのである。此日光を妨ぐるほどの闇はない。換言すれば如何なる闇も日光に負けて仕舞ふのである、如何なる吾人の罪惡も佛日に頭が下りて、初めて、大慈大悲の本願を以て満足さるゝのである。聖人が盡十方無碍光の破闇滿願の徳を力説したまふのが是である。

○此に於て吾人は原始眞宗に於ける如來の本願なる大音宣布と、大慈大悲の徹到とに回顧せねばならぬ。現時眞宗に於ける病根は、如來本願の淵源に汲むことの出来ぬ様になつたことである。本願なる大震雷が感ぜられぬほど癡痺して居ることである。本願といへばとて文句ではない、教理ではない。歡喜の心持を當てにするのでもなく、勿論未來の結果を目的とするのでもない。

但使^ト廻^ル心多念佛。能令^ニ瓦礫^ト變^ジ成^ス金^ト。
是たしかに法然上人が弘願一乘を説きたまふ源泉である。而して親鸞聖人に至りて、四海兄弟同一念佛無別道故の淨土眞宗として、御同朋御同行の實行となつたのである。

○之を要するに絶對無限の大慈大願によりて、善惡、貧富、智愚、凡聖の區別なく、平等一味の佛智に融合さるゝのである。『名號不思議の海水は、逆謗の屍骸もとゞまらず、衆惡の萬川歸しぬれば、功德の潮に一味なり。盡十方無碍光の、大慈大願の海水に、煩惱の衆流歸しぬれば、智慧の潮に一味なり。』此に至りて四河海に入りて鹹味となる如く、四姓佛門に入りて釋種と稱せられたる佛教根本の眞精神を再現せられたるものである。

○釋尊を以て印度四姓の階級制度を打破して、社會改革にても企てられたるが如く論ずる社會論者も感心しないが、併涅槃の鹹味は一切の階級男女貴賤同一なる

い。貧富貴賤、智愚利鈍、有學無學、有罪無罪、持戒破戒、有智無智、大小聖人、重輕惡人、五逆十惡、謗法闡提、如何なるものをも矜哀悲愍ましまして盡く見捨てたまはず、あされたまはず、遂に選擇大寶海に歸して、念佛成佛せしめたまふ超世無上の如來の本願の出現によりて、人世初めて絶對救済の佛日を認めたとある。『本師源空世にいて、弘願の一乘ひろめつゝ、日本一州ごとく、淨土の機縁あらはれぬ。智慧光のちからより、本師源空あらはれて、淨土眞宗をひらきつゝ、選擇本願のべたまふ』との和讃を誦するとき、如何に當時の日本が選擇本願の出現によりて夜が明けたかが想像さるゝに餘ある。

○全體法然聖人が選擇本願を宣へたまふときに用ゐられたる文字は、法照禪師の五會法事讃が源である。曰く彼佛因中立弘誓。聞名念我總迎來。不簡貧窮將富貴。不簡下智與高才。不簡多聞持淨戒。不簡破戒罪根深。

境界を開き來りて、精神的に融合されたる絶對無碍の平等の信念は、有形社會の問題に大なる結果を來したに違ない。併此結果を來したる根本精神に汲まなければならぬ。此に至りて涅槃經の偈を想起せしむるものがある。曰く、

如來語一味。猶如大海水。是名第一諦。故無無義語。如來今所說。種種無量法。男女大小聞。同獲第一義。無因亦無果。無生亦無滅。是名大涅槃。聞者破諸結。如來爲一切。常作慈父母。當知諸衆生。皆是如來子。世尊大慈悲。爲衆修苦行。如下人著鬼魅。狂亂多所爲。

いつも渴仰する梵行品阿闍世王入信懺悔の偈文である。親鸞聖人之を信卷に引用して、本願醍醐の妙味となしたまふを以て見ても、如何に釋尊の眞意が親鸞聖人の眞宗に於て、實現せられたかを知るべきである。○此の如く如來大悲の平等一味海に融合して見れば、大小の聖人も善惡の凡夫も、其本來のものを齧へして

同一鹹味となるのである。善人善を以て誇るべからず、悪人悪を以て悲むべからず。如何なる大小の聖人も如来の膝下に跪きて、重軽の悪人と手を聯ね、五逆十惡も三賢十聖と肩を並べて、涅槃の城に入るのである。さればこそ救異鈔に我等が心の善さをは善しと思ひ、悪しきことをば惡しと思ひて、本願の不思議にてたすけたまふといふことを知らざることを誡められてあるのである。

○吾人日常行爲の標準として、無形的に一切の方面に用ゐられつゝある是非善惡にしてすら此の如くである。況んや貧富財産の問題の如きに至りては、必しも富者誇るべからず、貧者悲しむべからずである。然れども善惡が我等の行爲の標準となる上に於て、常に苦心の根本である如く、貧富の問題が我等が日常生活の問題に於て、片時も心より離るべからざる必要なる問題である。故に將來此問題を忽にすべからざると共に、宗教の信念の結果も此點に於て大なる效力を持來すこ

と、釋尊の教が四姓の別を融合された如くあらねばならぬ。而して其根源は精神的信念に淵源することを忘れてはならぬ。近時行はるゝ救濟なるものが、人間が人間を救濟するかの如き響を持つことは、甚だ面白からぬ傾向である。物質を以てのみ人心の調和を持來すものではない。恐くば現時日本に於て、否世界に於て人心の調節我執の融和を缺くことが、現代の最大病根である。強者富者は其我慾我慢を廻へして、如来の下に跪き、弱者貧者も自暴自棄の倒行逆施を齎へして、如来の慈懷に入るべきである。政治も實業も、教育も道徳も、内治も外交も、社會も國家も、軍國も民本も、此四海兄弟の曙光に照耀されねばならぬ。是親鸞聖人が如来本願の下に、十方衆生の御同朋を説かれたる四海兄弟の念佛成佛是真宗の精神である。(九月二十六日第一高等學校徳風會講話救異鈔解題の大意)

絶對不二の教機

「正信偈講話」(行卷末ヨリ)

第一席

近角常觀

然就^ニ教念^ス佛諸善^ニ比較^ス對論^ス有^リ下難^シ易^シ對頓漸^ニ對橫堅^ニ對超涉^ニ對順逆^ニ對大小^ニ對多少^ニ
對勝劣^ニ對親疎^ニ對近遠^ニ對深淺^ニ對強弱^ニ對重輕^ニ對廣狹^ニ對純雜^ニ對徑迂^ニ對捷遲^ニ對通別^ニ
對不退^ニ對直辨^ニ因明^ニ對名號^ニ定散^ニ對理盡^ニ非理^ニ盡對^ニ勸無^ニ勸對^ニ無間^ニ對斷不斷^ニ
對相續^ニ不續^ニ對無上有^ニ對上下^ニ對思不思議^ニ對因行^ニ果德^ニ對自說^ニ他說^ニ對迴向^ニ
對護不護^ニ對證不證^ニ對讚不讚^ニ對付囑不付囑^ニ對了不了^ニ對機堪不堪^ニ對還不還^ニ
對對眞假^ニ對佛滅不滅^ニ對法滅不滅^ニ對利不利^ニ對自力他力^ニ對有願無願^ニ對攝不攝^ニ
對入定聚不入^ニ對報化對上^ニ斯義如^ニ斯然^ニ按^ニ本願^ニ一乘^ニ海圓融^ニ滿足^ニ極速^ニ無碍^ニ絶對^ニ不
二之教也亦就^ニ機對論^ス有^リ下信疑^ニ對善惡^ニ對正邪^ニ對是非^ニ對實虛^ニ對眞僞^ニ淨穢^ニ對利鈍^ニ
對奢促^ニ對豪賤^ニ對明闇^ニ對斯義如^ニ斯然^ニ按^ニ一乘^ニ海之機^ニ金剛^ニ信心^ニ絶對^ニ不二^ニ之機也

一 信の源は行

一 夏季求道會も今年に到りて既に八回となり、年々親鸞聖人の『教行信證』を講本として話させて貰うて來た。御承知の如く第一回に於ては『信卷』より始めて、その『信卷』の方に四年かゝつた。『信卷』は聖人の信仰上最も重要な、所謂蓮如上人が聖人一流の御勸化のをもむきは、信心をもて本とせられ候。

と言はれた、その信心を示されたる『信卷』なれば、先づこの方に初め四年を費し、終りて前に戻りて總序の文より『教卷』にかけてを次の一年に話し、それより『行卷』にゆきて茲に二年、今年はその三年目にし、彌々、今年を以て『行卷』を終らせて貰はふと思ふ次第である。

二 既に御承知下さる如く『行卷』にありては、これ迄の所、初めより佛の眞實行の有難きことを繰返し、讚仰せられてあつて、而して只今拜讀の處は、彌々最後に聖人が淨土眞實の行、南無阿彌陀佛を讚歎なされた讚歎の極

八

まり、言へる丈け有らゆる言辭を列ねて讚仰せられた、讚歎の文とも申すべき處である。即ち聖人としては感激の絶頂を記された處になつて居るのであつて、即ちそれより終に『正信念佛偈』の御述作となり、知恩報徳の至情を竭くされたといふ、斯ういふ所に當りて居るのである。

三 故に『教行信證』としては、何れの所と雖肝要ならざるは無く、孰れの所と雖聖人の御腸ならぬは無けれども、殊に今年の所は聖人の告白、啓白の御言葉として、その絶頂に達した處とも申しうるのである。言ふ迄も無く『教行信證』としては、今いふ『信卷』が聖人の信仰を盡くされた卷として、最も眼目であると言ふ迄もなければ、併しその『信卷』の根本——殊にその信を求むる人にとりて最も大切な、何程『信ずるのだ』『喜ぶのだ』と力を入れて言はれても、その信は抑々如何にして起つて來るのであるか。その信念の大もとは何から來るのであるか、といふ事になるとその本は行となつて來るのであるから、此の點より申しても、最も有難い所となるのである。

二 信ぜざる可らざる力の存在

四 これは今日は挨拶もせず直に信仰問題に這入つたのであるが、現今世界の有様は、世の中擧りて信仰の必要に迫られて居る。即ち如何にして眞實なる、徹底せる信仰を攫む可きかといふ、之が現代社會の聲である。これは理屈言はずに人心が、皆なそれに歸向して居る如くにあるのである。且つ信仰が必要であるとすると、親鸞聖人の言はれる信仰なるもの、教えなるものが、唯一徹底せる信仰であつて、萬人がそれに狙を定めて得なければならぬとは、必ずしも眞宗信者と言はず、今日日本全體の聲であるかに思はれるのである。猶ほ大きくいふと、今日世界の動搖亂も、その根本たる思想に缺陷があるからであるといふ所迄は皆な氣が附いて居るのであるけれども、さらばその眞實の信仰、親鸞聖人の仰せなるものが、果して如何にして得られるか。或は總てが同一に信仰を得るといふことは、難いのは有るまいかと、大體斯ういふ所に行き着いて居るかの如くにあるのである。

五 處がそこに行く

故聖人のおほせには、親鸞は弟子一人ももたずとこそおほせられ候ひつれ。そのゆゑは如來の教法を十方衆生にとさきかしむるときは、たゞ如來の御代官をまうしつるばかりなり。さらに親鸞めづらしき法をもひろめず、如來の教法をわれも信じ、ひとにもをしへさかしむるばかりなり。そのほかはなにををしへて弟子といはんぞと、おほせられつるなり。云云。(御文)

と云はれてあるのだから、聖人の信仰は聖人の人格に特有の信仰では無い。苟も人間である以上、十方衆生である以上、如何なる者も同一に頂くことを得べき信仰であることを明に言はれてある上は、そこになると日本の人も世界の人も同一に、皆なこの信仰に徹せさせて貰はねばならぬ譯けである。

六 そこになるとその信仰は、爾らば如何にして得られるか。如何に修養して到れるか。又信者の人にする時は、如何にして聞き開くことを得るのであるかと、皆さんが聞き、徹底するに骨折られるのであるけれども、

そこに骨折るのでは無いのである。そこに力を入れる
のではないつ迄経ちても駄目である。それでは信仰を持
ち代えて自分の自力にするものであつて、即ち『自分
が徹底するのだ』『自分が修養するのだ』との自力修養
になるから、それでは何時迄やりても可かぬのである。
七 爾らば親鸞聖人の『教行信證』に言はれる信仰は、
何を信じ、如何に信ずるのであるか、といふに、『教行
信證』總序の文には

爰に愚禿釋の親鸞、慶ばしき哉、西蕃月支の聖典、
東夏日域の師釋に、遇ひ難くして今遇ふことを得た
り、聞き難くして已に聞くことを得たり。眞宗の教
行證を敬信して、特に如來の恩徳の深きことを知ぬ。
斯を以て聞く所を慶び、獲る所を嘆ずるなり矣。

即ち聖人の『信卷』で言はれる信仰は、何から起るか
といふに、
『眞宗の教行證を敬信して』とある。即ち偉大なる或る
力があつて——即ち今日講本の所の御言葉で言へば、『
弘願一乗海の偉大なる、信ずべき力があつて、信ぜん
と務めて』と無く、
信ぜざらんとするも、信ぜずには居れぬ或る力がある

た聖人の信との關係である。この行信關係が問題とな
りて、昔より相當に難解とせられて居る處なのである。
九 處て今、日本の思想界は妙なことで六づかしくな
つて居る。即ち古い言語で言へば同じことでも古くな
り、新しい言葉で言へば新しく聞えるとなつて居る。
今この行信關係の場合に於ても、
聖人が天才であらるゝ故、斯くの如き徹底せる信仰を
抱かれたとなると、聖人特有の信仰となりて、他が眞
似出來ぬこととなる故、聖人としては之を偉なりとし
て渴仰することは出來るのであるけれども、それでは
我々としては御跡が慕えぬこととなる。故に聖人の信
仰は然ういふ特有的の信仰では無くして、
その源は法然上人の説かれた『唯念佛して彌陀に助け
られ參らすべし』との遣る瀬無き力、即ち弘願一乗海
がある故、その結果として之を知らされた程の者、何
人も自然に信ぜずには居れぬとなる信仰であるのであ
る。

一〇 喩えば我々一友人に絶対の信仰を起し、彼の言
ふことなら何事でも絶対信ずるとなると、『偉らく信
じたものだな』と人は言ふかも知れぬのである。けれ

故、信ぜずは居れぬとなつて來る信仰であるのである。
故に混雜するけれども、先づ茲の處を少しく申上げな
ければならぬ。併し餘り秩序立てることに氣をとられ
ると、それらに縛らるゝ故、成る丈け自由に聞いて頂
かうと思ふのである。又皆様に於かれても成る可く氣
樂に、寧ろ心の今の問題として味はつて頂き度いと思
ふのである。

三 行信關係

八 六かしくなるけれどもこは古より親鸞聖人の書物
を讀む上に、大問題となつて居る點であつて、專問語
で言へば、即ち
行信關係の問題である。即ち
法然上人が南無阿彌陀佛の行と言はれたのと、親鸞聖
人が夫れを信ずる信と言はれたのと、この關係の問題
である。も一つ言へば『歎異鈔』二章に
親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀に助けられまゐら
すべしと、よき人のおほせをかうふりて、信ずるほ
かに別の仔細なきなり。
と言はれた、その法然上人の仰せと、それを信じられ

ども、信じたのは信じた者が偉らいからて無く、信
ぜさせる友人の方に、信ぜさせる丈けの物があるから
である。故に君も先づ彼の友人の眞實を聞け。かの親
切を聞けば之を頂かずに居れぬて無いか』と、即ち
法然上人の言はれたのは、斯く先方に容易ならざる、
味はなければならぬ、偉大なる或物があるから、之を
味はなくてはとのことで、即ち
それが行とのことであるのである。

一一 故に今日世間一般に、『信仰で無くては』徹底仕
無くては』となつて居るのであるけれども、更にその
大もとに斯く徹底せしむる、偉大なる根源のあること
は聞かうとせず、總ての人が唯徒に信仰々々と騒いで
居る現狀である。併し信仰の必要なると同時に、その
信仰の起る根本——それは即ち
他力弘願一乗海があることを聞かねば信仰の起ること
は無ないのであるから、それを聞くことが肝腎であつて、
それが即ち行とのことなのである。故に『教行信證』
としては『信卷』が肝腎であるに違はぬも、今日はそ
の信の起る根本の力の存在、それを明にすることが急
務であつて、それを示されたが『行卷』である。故に

この兩三年來『行卷』を讀ませて貰つて居る次第なのである。

一二 そここへは後に言ふべきを今いふことになるけれども、今年主として話さんとする

『正信偈』は何かといふに、御承知の如くその前書きには、

是を以て知恩報徳の爲め、宗師の釋を披くに言く。

夫れ菩薩の佛に歸する、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜已に非ず、出沒必ず由あるが如し。恩を知て徳を報す、理宜く先づ啓すべし。又所願輕からず、若し如來威神を加えたまはずば、將何を以てか達せん。神力を乞加す、所以に仰て告ぐと。爾れば大聖の眞言に歸し、大祖の解釋を聞して、佛恩の深遠なるを信知して、正信念佛の偈を作て曰く。とあつて、即ち先きより言ふ如く、聖人が有らゆる言辭を盡くして、今いふ佛の偉大なるお力を讚歎なされ、その絶頂に達して言語絶え果てた最後に、その廣大念佛を正信する偈を作りて、自己の内心を啓白し、聖人の信界を述べられたるものなれば、成る程信仰も必要には違はぬも、その信仰の來る大もとは、聖人が今いふ

佛の偉大なるお力を頂かれた、それが總て信仰となつて表はれた譯なのである。故に、信仰の源泉はこの弘願他力、南無阿彌陀佛の眞實行があるから、その結果が自然信仰となつて表はれて來るといふ、その大切なる大行であるのである。

四 絶對不二の教、機

一三 それ故前年來申陳ぶるが如く、この『行卷』にありては、段々とその佛の眞實行の偉大なることを稱歎せられてありて、而して彌々今日の所には

『然に教に就て念佛と諸善と比較對論するに、難易對頓漸對、橫堅對……有り。』

即ちその廣大なる眞實行の念佛を、他の諸善と比較對論して

四十八對——即ち御覽の如く、難易對、頓善對、……といふ具合に、四十八通りの對を擧げて、即ち言へる丈け言うて見やうといふ調子で、讚歎なされたものである。即ち苟も言葉に懸る限り、右からも左からも言へる丈け言はうと、終に四十八通りの對に言うて見られたものである。而して然う言はれた最後に

『斯の義斯くの如し。然るに本願一乘海を按ずれば、圓融満足極速無碍絶對不二の教なり。』

結局口にも言葉にも絶え果てた、圓融無碍絶對不二の教であると、終に斯ういふことに言うて仕舞うておいてなるのである。

一四 又次に機に就ても

『亦機に就て對論するに、信疑對、善惡對……有り。』

斯の義斯くの如し。然るに一乘海の機を按ずるに、金剛の信心は絶對不二の機なり。知る可し。』

斯く偉大なる佛力故言を極めて讚歎なされるが、それは唯佛の手許を眺めて讚歎なされるばかりでは無い。その偉大なる佛力は誰の上に来るかといふに、一切善惡の凡夫人なる我人の上に佛の方より加えらるゝのである故に、その徹到の一念には、その廣大のお力が、この罪深き凡夫人の心の中に充ち満ちて、——即ち我々が救はれた様見ると、我々の頂いた信心そのものが、我が心にして我が心にあらず、佛の眞實心の入り込み、入り満ちて下されたが信心であるのである。こは我々友人を信じたのは、我に信ずる力があるにあらず、信ぜすには措けぬ友人の親切心

の力の故に、終にそれが此方の心に徹到して、信ぜしめられたのにて、即ちその端的にこの罪深き疑深き人間が、疑はうにも疑へ無くなるは、即ち先方の偉大なる力が此方に貰ひ受けられたからである。故にそこになるとこの度びは又、

一五 こは『歎異鈔』七章にも『念佛者は無碍の一道なり。云云』——

念佛者と者の字が附いてある。者は即ち稱える人間である。我々唯徒に彼の友人は偉大だ〜と言うて居るのが信じたのでは無い。その友人の偉大なる眞實が徹して、此方の心に到り届いた處で念佛者なのである。その力が到り届いて下されると、我々罪深き淺間しき身なれども、その者が、

念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆへに、無碍の一道なりと云云。

この偉大なる力が我々の心に到り届いて下された時に

は、頂いた私が念佛者、
そこが即ち機なのである。

一六 故にその機に就て對論するに、信疑對、善惡對、……と、今度は十一通りに言うてあつて、『斯の義斯くの如し。……絶對不二の機なり』即ち我々この信心頂いた眞實信仰の者になると、語弊を生ずるかも知れぬけれども、私を離れて佛の絶對が存在するにあらず、佛の絶對は我が爲に存するのであつて、即ち頂いた私自身が、この度びはその佛の絶對を吾が物に味はせて頂くことが出来るやうになるのである。殊にこの機が絶對であるといふ所の味ひは、彌々我々の心にお慈悲が届いて下さる處であつて、茲が最も聞いて頂かねばならぬ所。即ち今日『絶對不二の教、機』と題したのも、實はこの意味を聞いて頂かぬが爲めであつたのである。

五 人生最後の尋ね

一七 そこでマア可成く分り易く申述べるとして、實は『行卷』の事故、法然上人の教を本として話すが

と言はんか
嚴肅な場合に臨んで、『私の話を聞き度い！』——私は「あゝもうこれ一つで澤山だ、これを聞かして貰はうとて、東京に居た譯だ。あゝ平日くどくどと澤山さうに言ふて無い。今生さるか死ぬるかといふ、この生死の場合に於て、お慈悲の水を與へること、これ一つが肝腎だ。あゝ、本人もよく聞くと言はれたもの、親も聞かせ度いと思はれたもの」と、大に満足して『参りませう』——参つてお話することになつたのである。

一九 すると年若き青年の方、病床で私に何聞かれたかといふと、『先生、その助ける佛があるとのことが、何うして分るのですか』と——之が議論半分て無い。人生總てのこと、勉強したのも何したのも皆な空となつて、『もう信仰一つを聞かんならぬ』と、それで私が参つて居るのである。この時の尋ねとして、まことに明瞭な尋ね。殊にその方にする、そのことは平日聞いて居る、佛あり本願ありとのことは常に聽いて居るのであるが、『それがあつて何うして分るのですか』分れば信ぜられるのである、分らぬ故信じられぬのであるから、一言なる

順序であるけれども、先づ分りよい處で——先達て或一人の方が訪ねて見えて、『自分の子供が病氣である、本人も是非私の話を聞き度いと言ふし、親心としても聞かせ度い。何うか來て呉れ』との御依頼であつたのである。段々様子伺ふとそのお子といふのが、帝大で勉強して居られたのが不幸病氣に倒れられたのだそう、もう餘程迫つて居られるのだそう、如何にも氣の毒な話である。それで『本人も聞き度いといふし、親心としても聞かせ度いから、是非來て欲しい』といふたつての御話であつたのである。

一八 そこで私大に有難かつたといふは、始終あることなれども私の思ひ通りいふと、随分私も長らく東京に居て青年の方に聞いて頂き、又皆様も熱心に地方からも上京して聽いて下さるとなつて居るのであるも、甚だ愚癡なこと言ふやうであるも、何うも私が聞いて欲しいと思ふ丈け、皆様に聞いて頂かれぬ憾みがある。或はもつと分るやうに話しすればよいて無いかと言はれる方があるかも知れぬ。處が今の方は平日に於ては誰も左程に思はぬも、今斯くの如き、何

も誠に好き尋ね。——青年の人が理屈から聞かれるのとは違つて、彌々の最後の尋ねなのである。最もその方の心には、この時のみならず、始終の問題としてあつたのならんが、それがこの時最後の尋ねとして出たのである。

六 我等は岸下に墮ち込みてあり

二〇 て私は大に感じて何う言うたかといふに、常にいふ諭え『今佛の廣大の慈悲、力といふは岸上から卸された繩なのである。落ち込みて上れぬ人間に、之を届けてと岸上から卸された繩なれば、之を攫まずには居られぬて無いか。もうこの時この際、この繩一つが力であらう。今如來が正覺を成就して南無阿彌陀佛の名號を與へられたといふは、十方衆生にこの繩を卸して下されたものである。』——

二一 處で一方は病人、殊に重態の場合故、先方に言を費させまいと思つて、『この話は貴方もこれ迄聞かれたのならんが、今貴方の尋ねは、佛がこの繩を何の故に卸されたか、それが分らぬとの尋ねであらう。』と。——そこで私の言ひ度かつたは、だつた一言で

あるも、その一言が病人故思ひ切つて言はれぬ。漸くにして申したは、『甚だ察し過ぎた言ひ方であるも、抑々貴君は岸上の佛が分らぬと言うて居られるのであるも、その分らぬと言はれる貴方が、今何處に居ると思つて居らるか。全體宗教は佛と衆生とを結び附くるもの、本願は凡夫の爲めに起された如來の救濟であるなどい、横から眺めて氣樂に批評して居られるならば結構であるも、今我々はそういふこと言うて居られる、中間的地位に居るので無い。今正に崖の下に墮ち込み、上がれぬ人間が御同やうて無いか』と。つまり『今貴方は佛が分る分らぬなど言うて居られるのであるも、そういふ貴方の身體は如何なる運命にあると思つて居られるか。五月雨明きが分らぬ身の上で無いか』とのことを、それが私氣強くやれぬから、遠廻はしに申したのである。

二二 すると矢張り『分らぬ』と言はれる。私『イヤ他力はその分らぬ者、崖下に墮ち込み分らぬ者を救はふといふ、大悲である。よく青年の方などは、近角の話は有難い』と、あれは感情である、我々は

理性に承知が出来無ければなど言はれるのであるも、設え感情からであらうが理性からであらうが、何からにした處が、崖下に墮ち込んで居る者が、崖上のことが分る筈が無いては無いか。これは寧ろ分らぬが當り前、分らぬ筈なのである。』

二三 『よく青年の方などは、修養して心を綺麗にして行かう、冥想して明に觀察して行かう。かく思はれるのであるけれども、綺麗に行はんとすればする程、綺麗になる能はぬのであるし、明に佛を見んとすればする程、見ることが出来ぬやうになつてゆくのである。故に實際感情から言つても何程美はしくやらうとしても及ばぬのであるし、智識の上からも我々は既に崖下に墮ちて居る人間である。又肉體から言つても我々は無常の體であらう、何時知れぬのであらう。その無常の體持ち分る分らぬと言つて居んならぬのが辛いであらう。も一つ言へば我々自分も生き度いと思ひ、親も生かし度いと思ふのであるも、無常の世なれば思ふやうにいかぬのが辛いであらう。』と、段々

この意味のことを察して話して行つたのである。

七 救ひの御眞實

二四 處が何でも無い時言ふならば何でも無いことになつて仕舞ふのであるけれども、病人の人が之を聞かれたのである。昨冬の友人の夫人が胃癌で無いかと診て貰ひに行き、『こゝに塊があります何てせう』とそれが問題なのだ』——言はれるなり逆上して倒れんばかりであつたと言はれた(本誌本年第貳號參照)が、今の方も之を聞かれて、初めて崖下に墮ちてることが分られたのである。

二五 茲は我々初めからそれが分る程ならば崖下に墮ちてやせぬのであるけれども、我々それは初めからは分らぬ。分らぬがその絶對の谷底に墮ち、頼みに思つた智識も何も碎けて仕まひ、永劫の闇黒におち込まねばならぬを見て下された佛は、『その永劫の闇に墮ち入つてどこに一つ助け無い身であるのが如何にも惱ましいてあらう。察するぞ、見てやるぞ』と、その廣大の佛ごころが崖の上より手をのべて

效ひの繩を御して下されたと、斯ういふことであるのである。

二六 言つて居る中にその方は或る意味で非常に驚かれた御様子であつた。故に話す時は如何にも氣の毒であるも、言ふこと丈けは言はなくてはならぬ。併しその親兄弟でも、乃至健康智識でも、最早や如何なるものでも可かぬのだといふは、そのいかぬが捨てられるといふのでは無い。そのいかぬを飽く迄哀はれみ知召して、その者の爲めに茲に遣る瀬無き本願眞實の救ひの綱だと、これを言ひ度いばかりであるのである。

二七 て言つて居る中にその方は様子がガラリと變られて、言はれたには『先生、イヤ、そのお話はこれ迄も度々聞きました』と、初めて思召の深さが分つて、感に堪えぬといふ御様子であつた。然うたらう、茲でも私親友故西川理學士が最後の時、この話で安心せられたといふことは度々申して居るのである。けれども自分が實地その身になると、今迄話で聞いて居たのと違ふ。

今この方の頂かれたのは、『今自分がこの闇み、何程聞いても分らぬ、この仕て見やう無いのを見て、そ

の仕やうの無いのを哀はれみ、察し、同情して下さる御親切——もつといふと『その哀はれなる様を捨て置かれず思召し、その者の爲めに態々救ひの綱を卸して下されずにはあれなかつた、その御眞實の深き一つで、その仕やうの無い方が腹ふくらせて貰はれたのである。』

二八 これは私なども現に苦しんだ時何處で安心させて貰つたかといふに、自分はこれ迄やつて来て結局悉くが駄目となり、最早や仕方なく成り果てたが、哀はれこの我が有様を理解し、同情して呉る、人ありて『汝の斯く成り果てた處に同情するぞ』——それも口先きばかりで無く、『汝と境界を共にし、運命を共にし、汝の苦しみのあらん限り汝と苦を共にして、汝の心の安まる迄は自分の方が手は引かぬぞ』此眞實の仰せが聞えて安心させて貰うことが出来たのである。斯く佛が私の罪、惱みの有らん限り飽く迄見捨て給はざるもまことを以て、その惱める衆生を救ひの綱で自分の境迄引き上げるか、自分の方が汝の爲めに引き上げられるか。

知らん、青年の要求せらる、最も新しい處のものは、實は古い處のものであることに氣をつけて貰ひ度いのである。説教で『慈悲の綱で引き上げて下さる』は直ぐ分るのであるも、青年の方にはそれでは分らぬ。その引き上げるには、『何か上げる力が無くては』何うして上がるか、出来るか』の問題になりて来るのである。それは我々よりせんとしては智識にも力にも及ばず、親兄弟でも、望みの絶え果てた苦心慘憺の處へ、佛の仰せは、友人の同情は『君は斯ういふこととて苦しんで居るのだらう、僕は豫てそこを見て、そこを引受けるのが僕ぢやと言つて居るのでは無いか』斯く言はれるのが分ると『君はそれ迄見て言うて、呉れたのか、有難う』と、これ一つで満足させて貰はれるとなるのである。今日は話が妙な方にそれたも、併し文句の解釋よりもこゝ一つが肝腎だから、今一つ申さして貰はふと思ふ。

九 喜ぶに非ず、喜べぬをや

るせなくのたまふ也

三二 これは私の學舎に居た人、而も矢張り高等學校時

一八
我が正覺の境まで汝を連れ込むか、自分の方がおとされて仕舞うか、斯く何處迄も我が力のあらん限り汝の其の苦を安ぜしめねば措かぬとある御眞實が即ち誓願一佛乗とのことであるのである。

八 古き言葉新しき味ひ

二九 故に先達ても『どうも先生の話に、説教聞きつけない人に話すがと二通りに言はれるが、あれが我々青年には耳障りになりて聞きにくい』と言はれた人がある。私から言ふと反對である。寧ろ青年の方には昔の言葉で佛の眞實を説かれてある、その眞味をよく頂いて貰はねばならぬ。又聞き慣れの信者は極樂往生のみ言うて居らず、今私の落ち込むを見て何處迄もその者を捨てぬの御眞實故、——即ち『汝が落ち込めば我も一緒に落ち込むぞ、汝一人を見放しにはせぬぞ』の御眞實一つから正覺御成就下された慈悲なれば、極樂往生よりもこの飛び放れた御眞實なることを聞いて貰はねばならぬのである。

三〇 それは新しき方には新しき一方で言ふと分りよ。古き言葉でいへば古るがられるのであるも、何ぞ

代より私の話を聞いて居られた人、先達來不幸氣管の病氣で大學病院へ入院し、入院中に非常に澤山血を吐いた。友人が『君氣落ちしてはいかぬぞ』言うてる中に漸く咯血が収まりて言はれたには『先生から常に聞いて居たとこだ。僕はもつと聞き度い。今こんなになつて僕はまだ分らぬのが情け無い』と。——それも平日講話の上で言うて居たばかりで無く、學舎に居て朝夕私の話を聞いて居た人である。第一自ら求むる積りて入舎し、聞かうとせられたのであるも、親しく聞けば聞く程却つて慣れ子になつて分らぬ。即ち聞かな／＼で何うしても聞けぬのである。今終に咯血となつた時に於て、今こそは平日先生より聞かされて居る所である。この時に於て有難いと喜び度いのであるも喜べぬ。その人その時言うたには『何といふ自分は誰太い者であるか、こんなになつてまだ分らぬといふは情け無い』と、これにて涙を流されたといふのである。これは大分信者の側にあり勝らな話になつて來た。

三二 殊にその人私に言うたことに、『自分は四人の兄弟がありて、兄は信仰に入つて喜んで居る。一人の弟

は高等學校濟ますなり病氣になつて死んだが、その時親が言ひ聞かせたら、弟は喜んで手を合はして死んで行つた。又親も一代あれ程喜んで逝かれたに、自分獨りは何うしても頂けぬといふは」と。こゝが甚だ肝腎な處なのである。

三三 これが何かといふに『矢張り喜ぶのぢや、頂くのぢや』と、何うにかすれば下より手を差出して、上に届くとのやうに思つて居るからである。喜べるは、他力は他の力の故に喜べるが、自分の方からは何んなことあつたとて、喜べることは無いのである。『歎異鈔』九章には

なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきてちからなくしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。此方は彌々死ぬとなれば唯苦しむばかり、難有い嬉しなどの思ひは一つも無い。その仕やう無いのを佛より見て下されて、その一言有難いが言へんのを、それは汝言へぬ筈である。『故に私その方に』それは君思へぬ筈である。君、その時喜べ無い、その仕やうの無い、その心淋しさを佛かねて見て下されて

よるこばぬにて、いよく往生は一定とおもひたまふべきなり。

喜べたら煩惱具足の凡夫で無い、往生不定になつてしまふ。その如何にしても喜べざる汝が哀れとある慈悲が、満足大悲圓融無碍絶對不二の教であると、斯ういふことになるのである。

三五 そくてその仕やうの無い私をそこ迄捨てずに言ふて下さる慈悲を聴くと、この仕方の無い私、何程聞いても分らぬ、——今親に別れ友人に別れて逝かねばならぬ、——その私がこの慈悲一つに夜が明け

念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ、(歎異鈔二章)

敢て信仰に入つて死を急ぐことも無く、又死の問題ばかりで無く、好くならうが悪くならうが、死なうが生きやうが、地獄に行かうが極樂であらうが、何れの道でも仕方無き自分を、意外にも斯く迄見捨て難く思召す御眞實一つで大満足させて貰つて、生殺與奪を全く佛に任せ奉りて安心させて貰ふ。これが他力の安心と斯ういふことになるのである。

佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおぼせられたるとなれば、他力の悲願はかくのごときわれらがためなりけりとしられて、いよくたのもしくおぼゆるなり。

そこを見て、その者を遣る瀬無く言つて下さる慈悲である」と、此間別れに際して一言話したら、その方も今更の如く、『今迄何處か』と思つたが、初めて重荷を卸しました」と大に喜んで下されたことであつた。

一〇 生殺與奪佛に任かせて

三四 これは青年の方は自分の方から『信じやう』喜ばうとせらるゝの故、すればする程作り喜びになり、作り念佛になる。爾らず、我々の力としては何程努めても然うしかゆかぬ、その墜ちるより仕やうの無き有様を見て下された御眞實故、如何に墜ち込まんが喜ばまいが——寧ろ喜べざる者といふ憐みである。喜べたら煩惱具足の凡夫で無いことになつて仕舞ふ。『歎異鈔』の御教化には
天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、

三六 さて以上はこれ迄『喜ばねばならぬ』と、この考えて行き惱んで居られる方が数多くある。勿論十人十色であらうが、この『喜ばねばならぬ』て行き詰つて居る人が案外多いからお話したのである。實は今日はこのことを言ふ筈でなかつたが、それを斯く申したは何かといふに、先きより言ふ如く今日講本の所に聖人が何程言つても言ひ足らぬ爲め、言葉を重ねて四十八對が並べられてある。この並べてあるは

今いふ廣大の慈悲を頂かれたその有りなりがこゝに表はれて譯けなのである。故に皆さんに茲を腹に入れて貰つて置かねば、茲にお書きになつてある味ひが分らぬ。御馳走は之を陳べたのでは味が分らぬ、喰べたのでなくては。何うも講義は説明になりて、肝腎のものをとおとすことになりて困るのである。

一一 念佛諸善比較對論

三七 そくて講本の處になりて、『然るに教に就て念佛と諸善比較對論するに……』こは青年の方に申すに、諸善は諸の善業を修することである。即ち大ざつぱに

いふと修養である。念佛諸善比較對論は即ち信仰修養對論である。諸善は平日個々に善を修して行く自力修養であるから、修養はいつ迄やつても問題の切りがつかぬ。近來修養々々と大變喧しく言れてゐるのであるけれども、修養ではいつ迄も問題の徹底といふことが無い。故に念佛でなくては、信仰でなくてはと斯ういふことなのである。

三八 　そこでは青年諸君に思想を辿つて貰ふ上に分りよい爲め言ふのであるが、それは近頃流行る靜座といふことなども、成る程修養であるかも知れぬ。併しそれになると、自然有りとあることを理想的に行ふこととなるから、それが様々の問題に現はれて、様々の修養となり、即ち我々崖下の人間が様々の行を修して、

崖上の佛の境界に禁上らんとする、歴劫修行の大仕事となるのである。處がそれでは我々崖下の人間にはいけぬ故、茲に於てか念佛諸善比較對論が起りて、即ち念佛は上より卸されたる繩である。下より上にゆくは修養である。それでは行けぬ故、その者の爲め上より南無阿彌陀佛の綱が卸されてゐると、斯ういふことにな

を救はうとして下されたが佛の本願といふことなのである。するとそこで何故阿彌陀佛が有らゆる諸善は擇び捨て、唯念佛一つを選び取つて下されたか。それは二義があるといふことを言つてありて一つには難易義、二つには勝劣義。——これが即ち今日對の初めに、

難易對、勝劣對と出て居るのである。

一一 難易義、勝劣義

四一 何故

難易義かといふに、破戒無戒の我々には、戒行修行の六づかしきことは出来ぬ。南無阿彌陀佛は如何なる者も稱へられるから易い。故に難きを捨て、易きを取つて下されたのである。これは念佛は易い、他の諸善は六づかしいと言へば何でもないこととなるも、青年諸君に言ふと、即ち我々の言ふ修養が出来無いとのことである。自ら何程善くならんとするも、それは不可能だとのことである。即ち佛は我々のその如何程努めても修養の能はぬのを見て、その者に稱へ易き南無阿彌陀佛を取つて下されたとのことである。言ひ換へ

るのである。

三九 　これも一ついふと、法然上人の『選擇集』の御教化——こゝになると私懺悔の意味で言ふが、私あまり聖教を拜見せぬ故充分なことは分らぬも、

親鸞聖人の『教行信證』は、法然上人の『選擇集』を渴仰してお書きになつたのであることは誰も知る處であるも、それは聖人がすつかり消化して、形を無くして『教行信證』の何處に『選擇集』があるか分らぬ程にされてゐる。が併し茲に澤山並べてある對は『選擇集』の本願章をもととなし、猶ほ『選擇集』全體に書いてあることがもととなつて、斯ういふことに言はれてあるのかと、これは私が思はせて貰ふことなのである。

四〇 　それは全體法然上人の『選擇集』に示されてあることが——これは今年の講本が『正信偈』故、あとで彌陀の五劫思惟を言ふ時に叮嚀に申述べる積りであるも、抑々阿彌陀如來が我々を助ける爲めに、諸佛淨土の性生の行の中より、戒行、修行、禪定、智慧、菩提心——種々様々ある中より

唯南無阿彌陀佛の一つを選擇攝取して、之を以て我々

ると、何程思つても本當に善くなれず、罪惡に充ち、仕やうの無き我々なることを見て下されて、その者を捨てざらんが爲め稱え易き南無阿彌陀佛の

純粹大悲で救はふとある御眞實のとが、この難易義となるのである。即ち罪惡觀はこゝから出て来る。こは皆様が『諸善は難い、念佛は易い』と一口にいふて仕まへば夫れ迄なるも、

そういふて居る自分が念佛が稱へられぬ、善く出来ぬ、苦み多き、惱み多き自分である。如何に稱へやう、喰べやうと思つても、我々病人には堅い物は喰べられぬ。その喰べられぬ病人なることを見て下されて、その者に能々喰べられるお粥の南無阿彌陀佛をとのことであるのである。

四二 また

勝劣義は、今の難易義は我々の罪の深い方、惱みの多い方で言はれたのであるが、今その罪深い仕やうの無い病人に、何故この粥をといふのであるか。それは『汝の手製の持薬などはホンの間に合はせの薬の一部分だ、俺のは有りである薬の萬徳を集めた絶對薬だから之を遣らうといふのである』と。こは家にしても柱、

襖などは家の一部分、今家全體といふことになれば、この方が大に勝れて居る。今南無阿彌陀佛の粥には、藥も滋養分も、何もかも、皆な籠つて居る、故にこの方が絶対唯一の勝れた妙藥だから之を汝にとのお慈悲である、とこのことがこの勝劣義となるのである。

四三 處て以上の二義は今例として申述べた迄であるも、阿彌陀如來の本願念佛には、この外この類の有りとする諸徳が皆な現はれてある。『選擇集』十六章段、段々拜讀してゆくと、如何にもその處の御教化が際立ちてある。一寸舉げて見ると

未法萬年の後、餘行悉く滅じて、特に念佛を留めたまふの文。

未法となりては諸善てはいかぬから、特にその者に念佛を留めて下されたのだとのお示である。――

彌陀の光明は餘行の者を照さず、唯念佛の行者を攝取したまふの文。

彌陀の光明は餘行の出來ぬのを哀はれみて、その者との遣る瀧無きお慈悲である。故に餘行の者を照さぬ、唯念佛の衆生を攝取して下さるとである。

四四 『選擇集』は十六章段皆なこの調子でありて、御

等、總て『選擇集』はこの調子で、この點如何にも際立て、示されてある。故に當時の人に非常な驚きを興へたこととなつたのである。

四五 そこで諸善に對比してこれらの著しき念佛の特性を今日の處に並べ、即ち難易對、頓漸對等――殊に『選擇集』の今舉げた處にあるのが茲に來て護不護對、證不證對、讚不讚對、付屬不付屬對等、親鸞聖人の氣の附く限りを數え上げられたのが、即茲の四十八對となつたのである。この四十八といふ數に

是の心顛倒せず

近角常觀

一 顛倒の善果梵行を壞す

『是の心顛倒せず』の御文は親鸞聖人『信卷』の御文であるも、もとは是れ曇鸞大師の『論註』のお意がもととなりてある。全體親鸞聖人の淨土眞宗は、自から名乗

承知でもあらうが、又一つを言へば、

彌陀の化佛來迎のとき、聞經の善を讚歎せず、唯念佛の行を讚歎するの文。

阿彌陀佛は經文讀誦の者を讚歎し給はぬ、唯念佛の衆生を讚歎して下さる。又

雜善に約對して念佛を讚歎するの文。

『觀經』の末に

若し念佛する者は當に知るべし、此人は是れ人中の芬陀利華なり、觀世音菩薩大勢至菩薩其の勝友と爲りたまふ。云々。

と言はれありて、諸善の者に仰しやらぬ、唯念佛の者に仰せられてある。又

釋尊定散の諸行を附屬せず、唯念佛を以て阿難に附屬したまふの文。

釋尊附屬するに定散修養の諸善を以てしたまはぬ。唯この念佛のみを以て仕たまふてある。又

六方恒沙の諸佛餘行を證誠せず、唯念佛を證誠したまふの文。

或は

六方の諸佛念佛の行者を護念したまふの文。

意味ありや否や、本願が四十八故そこに意味があるや否や、それらは分らぬも兎に角數え、て斯く四十八を挙げ、最後に絶対不二の教なりとある。その然うある丈の廣大眞實の御力なることを、茲は御一人々々に各自の御實驗として味はつて頂き度いことである。毎日二席に分けて話すことに仕てある故、茲てしばらく休むことに致します。(第八回夏季求道會第一日第一席)

りて親鸞と仰せられし程にて、聖人の信の立場は、曇鸞大師の論註が基礎となりてある。

その『論註』の初に
顛倒の善果能く梵行を壞す。

なる御文がありて、こは顛倒の善果は、即ちこの世に

於ける我等の果報である。身體の健康を始め、富、幸福等この世の仕合なることが、梵行——梵行は清淨の行である。即ち我等が此の世で幸福なることが、眞實の正しき道を聞かせぬやうにするのである。これは嘗つて或る幸福なりし人が、この一語を聞いて俄に驚きを立て、信仰を聞かれるやうになつたと申す程であるが、我等は何程叩かれても驚かぬ。頭に瘤が出来る程叩かれても驚かぬといふは、耻かきことである。

さて之を茲に持ち出したは、この世間のことが顛倒であることを言ひ度いからである。この世間が顛倒であるとは

こは佛教でなくては言はぬ。基督教は神がこの世の幸福を與へ、この世間を與へたと説くのであるから、現世を言ふ所の教である。處が佛教にありては、如何なることが有つても

この世は皆顛倒と、こは他の教では無いことである。最も一時精神主義なるものがあつて、茲をさういふ風に言うたことがあつた。こゝは浮つかりすると、『現在斯くして

居られるのが恵み』と、これに成るから注意しなくてはならぬ。嘗つて地方から訪ねて見えた或人が、私の言ふのを何ういふ風に聞いたものか『現在生活に見て頂く、現在救済が有難い』と言つた人があつた。私、それは何か現在に物でも攫むやうに思つて居るのか』と大辯誡めたことがあつた。若し然うなるとそれは非常な間違ひで、この世は何處迄も當てにならぬのである。

二 凡夫の四顛倒

故に佛教には常樂我淨の四顛倒なることがあつて、この世は常住である、樂みである、我がある、淨かであると思つて居るのが、凡夫の四顛倒であるといふことを言ふのである。茲は餘程青年諸君には利く處なのである。諸君は何故求めて來らるかといふに『精神が充實し無い、空虚で力弱』と、即ち來らるゝ目的は寧ろ現世に於て充實し度い、力ある生活を仕度いにある。爾るにその現世は斯く何處迄も顛倒といふのであるから、それでは全く意味をなさぬことになつて仕まふ。

現に以前であるが或る青年雜誌を書いて居らるゝ人、私の話を聞いて、『我々は意義ある生活を欲するのである。爾るに近角のは、現在は夢である、意味が無いと言ふのであるから、それなら聞く必要が無い』といふて、聞くことを止めて仕まはれた方があつたのであつた。併し茲は何うあつても『大經』にもある如く

一切の法は猶し夢と幻（mita）と響との如しと覺了して、諸の妙願を満足して、必ず是の如きの刹を成ぜん。法は電と影との如しと知りて、菩薩の道を究竟し、諸の功德の本を具して、受決して當に作佛すべし。諸法の性は一切空無我なりと通達して、専ら淨佛土を求めて、必ず是の如きの刹を成せん。

一切の法は斯く飽く迄も夢である、幻である、苦空無常無我である。それを常樂我淨と思つて居るのが凡夫の四顛倒であるといふ、茲が心を潜めて聞かんならぬ處である。

又老人の方になると、斯く言へば直に『さうぢや、その通り』と言はれるのであるけれども、それが又本當で無い。一切の法は夢、幻は明に眼前の事實として存するのであるから、それをさういふ風に氣樂に言ひ過

して居るのが即ち顛倒の様であるといふ、そこを氣を付けて聞いて貰はねばならぬのである。

三 八顛倒

抑々こは

釋尊入涅槃の時は何うあるかといふに、阿難が佛に申して『如來滅を示し給ふこと何ぞ速かなる。願くば猶ほ世に住して化を垂れ給へ。』斯ういふ意味で願ひした時に、『汝は爾か言うけれども

諸行は無常なり、是れ生滅の法なり。此世は當てにならぬと豫て言うて居るで無いか。今彌々自分は涅槃に入るのである』と、斯くお説きになつたのが『涅槃經』の説法である。併し『諸行は無常なり』で、斯く此世は當てにならぬのであるが、その當てにならぬが何うなるか。その

あとの處が肝腎である。今日の信者の人は、當てにならぬと自ら自覺したよりも、寧ろ他より言ひ聞かされて言葉だけ覺えてその當てにならぬが何う救はれるか分つて居らぬし、又青年は當てにならぬと面白く無い故、當てになるやうにすることに骨折つて居るのが、今日

の信仰問題となつて居るのである。故に先きの苦空無常無我にしても、本當にそれが悟れて言ふなら悟道の言葉であるけれども、今日の日は

苦空無常無我だと泣いて居ることになつて居る。即ち世間で言ふ處の罪惡觀、無常觀。——この世は無常である、罪惡である、泣き悲む意味の苦空無常無我であるならば、それだと常樂我淨の、人生は樂しき所と當てにする方と同じことになつて來る。今我々が仕合せだ／＼と幸福を喜ぶのと、難儀な人が困つた／＼と泣き悲むのと

心持ちは一つこと。即ち當てに仕て居るから、泣き悲まねばならぬことになるのである。それを今日の信者の人が少し事あると『無常ぢや／＼、當てにならぬ／＼』それで頂いた積りて居るけれども、ナニ實は泣いて居るのである。故に少時すると忽ちあと返りして又もとの人生の當てになる方を追ふと、斯ういふことになつて居るは、詰り一つ道を行き反り／＼仕て居るに過ぎぬのである。言ひ換へると私共常住を樂むも本當で無いし、無常を悲むも本當で無い。故に『涅槃經』には、今の常樂我淨の上に苦空無常無我

迄入れて八顛倒として示されてあるのである。

四 善惡共に顛倒の妄見

こは毎もいふ話であるけれども、私の懇意な或慈善病院を經營してゐてになるお方が『病人を直してやつて『先生のお蔭で』と禮言はれると、佛のおかげだと有難く思ふけれども、直してやつてあとで遇つても挨拶もせられぬと、強ち禮言うて愆しいと思ふては無けれども、挨拶もせぬとは非道い奴だといふ心が起つて、イヤになる』といふことを言はれたことがあつた。その方の考ては人に禮言はれぬと不足が出ると思つて居らるゝのであるけれども、その反面は言はれた時に佛のおかげだと言ひつゝも、矢張り言はれて喜ぶ故、言はれぬと腹が立つ。すると『言はれぬと腹が立つ方も善く無いけれど、言はれて喜ぶ方も考えなくてはならぬで無いか』と申したことがあつた。我々言はれて喜ぶ故言はれぬと不足が出る、詰まり同じことである。この世の仕合せを喜ぶも迷ひなれば、子供が亡くなつて當てにならぬと悲むも迷ひてある。『イヤ不足いふ方は善くあるまいけれども』

ども、喜ぶ方はよからうで無いか』と。ナニ喜ぶ方は出来るけれども、不足いふ方は出来ぬといふ我々でも無いのである。之が何か。人生は善からうが惡しからうが、喜ばうが悲まうが、皆な顛倒であることを言ひ度いのである。

處が中には『子供が親に先き立ちて逆ごとであります。これがこの世の顛倒の様であります』とやうに言ふ人がある。私此間或るお方にお話した。非常に人生に成功せられた人で、子供の方も皆な立派になつて居られる。家庭は圓滿で申分が無い。自から稱して『これ私死んでも充分な筈であるけれども、何うも心淋しくて困る』と。子や孫や十何人を周圍に置きて八十一歳といふ年をして『死んでよいのでありますけれども何うも／＼』と言つて居られる。私『それは御最もである。私より言ふと寧ろ反對である。貴方充分で不足無いに就け、益々以て死に度く無いと思ふてせう。境遇がよきに就け彌々以てこの世が残り惜しいでせう』と申上げたことである。又反對に『この世が面白く無いから死んで

仕まい度い』これは悟りか。矢張り顛倒である。即ち善きに就け惡しきに就け、何れも顛倒の妄見となつて來るのである。

五 一足飛びに飛び越える惡癖

處てこのことを説くが佛敎なのである。何うも近頃私の言ひ方が際立て過ぎるのであるけれど、何うも世人が宗教といふと何の宗教も同じことに思ふて居るのであるけれども、茲を説くが佛敎なのである。此の世は夢、幻、偽り顛倒、これを言ふのは佛敎の外に無い。處が茲迄はまだ分り易いのであるけれども、このあとが六かしい。この夢、幻、顛倒、當てにならぬを救うて頂くとこが六つかしいのである。そこを一つ旨く言は無くてはならぬ。處が茲が手易く頂けるのなら事無いのであるけれども『淨信得難く、極果證し難し』

——茲がなか／＼手易くいける處では無いのである。どうも近頃變な話方になるのであるけれども、大分此頃は今迄の説敎聞いてゐて居る人が聞きに來て下さる。聞いている人が聞きに來て下さるは、何處か頂き難い處があるからであるから、それ等の方々には

茲要の處を申さなくてはならぬ。そこで先づ上來申
述る如くこの世のことは何事も當てにならぬ、皆な夢
幻である。そこは御一人々々によりて色々あらんも、
彌々當てにならぬとなると、もう仕やうが無いといふ
外無くなつて来る。處が今迄聞き慣れの方は、茲てそ
の當てにならぬから佛のお慈悲であると、ホイと
一足飛びに飛び越えて仕まふ癖がある。『この世は當て
にならぬ、故に慈悲の外は無い、佛の外は無い』と
自分の方から飛て仕まふ癖がある。處が旨く飛べるな
ら結構であるけれども、小野の道風の蛙で無けれども
なかく、そこが旨く

飛びつけて居ぬのである。成る程『仕やうが無いから
南無阿彌陀佛々々』と、一時は心がらくになること
もあらう。が矢張り相續らずもとの所が動けて居やせ
ぬのである。茲が本當に皆様の心に安心仕にくくなつ
て居る處だから、
茲をよく聞かな。殊に佛敎の中でも自餘の自力修行な
らば、そふいふことであることもあらう。この世が當
てにならぬから、『サア何か確りしたものが無くては』
と、例えは淨土宗なら念佛稱へることもあらう。或は

は分つてる。仕やうの無い者を助けやうと言ふ慈悲
である。それは分つて居るも、本當に獲るのが六つか
し』など、それは肝腎のお慈悲の有難い、聞く可
き所を聞かぬから然ういふことになる。爾らばそれ程
喧しく言ふ
佛とは如何、本願とは如何。こゝが肝腎の點である。

六 お慈悲とは如何

それは色々にいふことが出来るのであるも、先づ私
の言ひよいよやうに申すことにする。今も申す如く人生
の快樂を樂み、不幸を嘆いて居る御同やうであるが、
彌々と行き詰まれば皆な致方なく苦んで居るのであ
る。そこで極めて分り易く言ふと、その如く一人々々
が行き詰り、行きつ戻りつ仕て見やうなく苦む御同や
うの心を一人々々に察して、『それが如何にも惱しから
う、心配であらう』と、その皆さんの苦む心、心配、
苦勞、悲み、――その心を
俗な言葉でいふと捨てずに、その仕て見やう無き心を
推量し、察しその者に何處迄も遣る瀬無く同情して下
さる大慈大悲の廣大の御まことが、
佛のお慈悲といふことなのである。

參禪觀察して慰安を求めるといふこともあらう。けれ
ども本當の我々の心底を言ふと、そういふやうに
一時的には救はれた氣持ちでらくになることはあるも
それが本當にいかぬから皆な困つて居るのである。故
に茲は根本的に能く聞いて貰はねばならぬ。全體今迄
信仰の聞き方が雑である。早い話が皆様が『他力の話
は簡單である。誰が聞いても能く分る。旨く聞き取つ
て信仰を得ることは六つかしいけれども、
話丈けは能く分る』と思つて居る人がある。これが非
常な間違ひである。そんなやさしく分ることならば、
何も親鸞聖人が

愚禿釋の親鸞、慶ばしき哉。西蕃月支の聖典、東夏
日域の師釋に、遇ひ難くして今遇ふことを得たり。
聞き難くして已に聞くことを得たり。眞宗の敎行證
を敬信して、如來の恩徳の深きことを知んぬ。斯を
以て聞く所を慶び、獲る所を嘆ずるなり。(敎行信證
總序文)

と喜ばれる譯けは無いて無いか。『頂くは六かしいけれ
ども、聞く段は出來る』程ならば、聖人が仰しやる程で
も無くなつて仕まふのである。夫れを皆んなが『他力
いふ佛なら
顛倒妄念の佛になる。全體善い者はよけれども、悪い
者は氣に入らぬと、この
善し惡しの心で人に向つて居るが御同やうの心なので
ある。故に好いと思ふのも可かぬし、悪いと思ふのも
可かぬ。いつ迄もこの心で人に向つて居るから、いつ
迄も
人生に善し惡しが止まぬとなつて居る御同やうの心で
ある。故にそのいつ迄も止まぬを遣る瀬無く思召す佛
は、善からうが惡しからうが
その止まぬのを哀はれんで下さる御眞實なのである。
茲は肝腎の處ですが分つたてせうか。分つた積りて聞
かれるのと、分らぬ積りて聞かれるのと、寧ろ
分つたと思はれる方は用心せられなければならぬ。

七 私の經驗

そこで先づ

私の入信の経験から申上げることにする。矢張り有體の處私なども他力の有難さは初めからは分らなかつたのである。こゝは他力の有難さが、初めから分るといふ人があれば、

いふ人のが怪しい。他力の佛はなか／＼初めから分るものでは無いのである。故に青年で他力を言ふ人は、必ず何か事寄せて言うて居る。或は宇宙の本體とか、或はこの人生が恵みであるなど、種々様々の事柄から佛を作り出さうと仕て居るのが、道理々屈から行かうとして居る人の方向である。故に青年の人は、本體だとか、宇宙の生命だとか、そらいふことに取り易い。

それよりか又この世の實際生活を、佛の御恩のやうに思うて居る人が多いのである。殊に修養的の人は、自分が綺麗な心になり、他の惡を憎まぬやうに、佛を理想として、その方向に修養を進めやうと思つて居る人が多いのである。私なども初めは之であつたのである。自分が人に不足言はず、佛を信ずる者が人に悪しくはせぬやうに」と、それ故

眞俗二諦にしても、俗諦は王法仁義の道を守り、成る

可く人に善くするやうにと、信者の人が皆なこれ言うて居る。即ち信者が俗諦をいふのと、青年が修養をいふのと同じ考へである。この考へも慈悲を言うてる限り他力の味ひは永久に分かる期無いのである。

八 私の氣のつき出したのは

處が常に言ふ如く私の氣の着き出したのは、その言うてる修養が本當に出來て無いといふ、そこで私は氣がついて來たのである。私だとして初めから人を不足に思ふたのでは無つた。寧ろ宗教の爲め、人の爲めには身を捨てる、苟も善と信ずることの爲には、生命を投出して惜しく無い。而して然ら思ふてる間は、自分ながら『熱心家ぢや、精神家ぢや、宗教の爲めには人がやらぬかて、自分が捨て、置くものか』と。これで長いこと、自分の學問を捨て、利益を捨て、やつて居つたのである。して然らやつてる中に段々自分の心を省みて見ると、確に自分は人より善く仕て居るといふ考がある。故に『人に褒められ度い』『善く言はれ度い』この考がある。それも自分の思ふやうやれてる間は、まだよかつたのであるけれども、思ふやう行か

ぬとなり出すと、『人は勝手なこと皆な仕て居る』と、そろ／＼人のことが不足になつて來たのである。『自分がこれ程やつて居るのに人が一向認めて呉れぬ。察し呉れぬ』と、これを考へるやうになりて初めて私の惡しさが見えて來たのである。今迄のが本當の犠牲的、献身的であるならば、人が認めて呉れぬかて不足の出て來やう筈は無い。それを人が認めて呉れぬと

不足の出て來るは『成る程これは今迄善くした／＼と思つて居たのが、本當に善くは出來て居なかつたのであつた。人に誇り度い爲め、自分が勝手な眞似して、人よりも自分は善く仕て居るといふ氣を起して居つた皆な名利心の所以であつた』と、これ今迄のが、皆な碎けて來たのである。茲辛い所である。自分の本尊と頼んで居つたのが碎けて來たのだから實に辛い。すると茲で今迄の佛も碎けて仕まふたのである。自分が善くすると理想で作つて置いた佛であるから、自分が立たなくなると何も彼も皆な一邊に碎けて來る。第一俺は善くするの考があつたのがいかにぬとなるのだから、私の仕たこと殘らずが皆な悪いことになつて仕まい、茲實に辛い所である。私の善はこれ駄目になつ

て仕まつたのである。今迄人の爲め宗教の爲めにと仕たこと、皆な俺は是れ程よくするぞの名利心の爲めであつた、とこれで段々顛倒の善であつたことが明になつて來たのである。

九 残るは妄念妄執ばかり

すると茲で信者の方は、『それは我々のすることは、皆な嘘であることは、そんなに念入れて言はぬかて分つて居るで無いか』と思はるゝかも知れぬ。そんな軽いことで茲が通ればよいのであるけれども、そんなことでは通れぬのである。第一皆様が自分の仕たことが嘘であつたとなつて、嘘でもよいで安心出來ますか。もう茲になると、再び陣立を立て直さうにも、もういかにぬのである。茲迄來ると今迄思うて居つた修養誠意、心に描いて居つた佛、宇宙の本體、皆な碎けて來る。故に唯心の彌陀、己身の淨土、心で作つた佛身觀なら必ず破壊する時がある。而して殘るは唯妄念妄執の思ひ計りとなつて來るのである。處が茲迄來ると皆様は、『だから佛』と直ぐ之を持ち出されるのであるけれども、茲になると

佛を持ち出して問題消えやせぬ。それは苦しいから佛前に行き念佛稱えるといふことはあらう。あつても不不變の心であるから何もならぬのである。茲になると最早や佛が有難いも何も無くなつて仕まひ、若し修養的の念佛なら

念佛も止つて仕まふ。而して遣るものは唯自分の淺間しいばかり、隔て心ばかり。悪しさばかり、而もその悪しさが世間の善し悪しの悪しさなら、悪しの半面に善いがあるからまだよいのであるけれども、茲になると全部が皆な悪しいのである。善いことせんすれば俺がするで罪、悪しくて可かぬと思へば矢張り俺がて罪、皆な非みなのである。茲になりて

皆さん何うなされますか。『だから佛だ』と言つた處がそんなこと言ふたつて、何もならぬ。まるで取り着く島も無いといふ有様。若し茲で取り着く島があれば自力で遣つて行つてよいのである。茲で皆様が『斯う考えて行つたらよからうか、斯う修養して行つたら行けやうか』そんなことで行ける位なら誰も苦しみはせぬのである。茲で皆様が他力々々と言うて居られるのが皆な自力になつてある。即ち仕方無し念佛、突き

つけの信念、すがりつきの歸命、姿は色々であるけれども、結局安心は出来て居ぬのである。

一〇 善し悪し思ふ自分の心

そこで茲は私の心にあつた順序で言ふ。話が混雜して充分申されなかつたのであるけれども、斯ういふことと丈けは御諒解下さつたらうと思ふ。それは少くとも

『我々

人相手ではいかぬ。我々人を相手に善いか悪いかか言うてるのであるも、人相手に善し悪し言うてる間は

いかぬ。故にこゝは然ういふ風に

人に善し悪し思ふ自分の心を解決しなくてはいかぬ』と。こゝは『誰しも初めは人相手に問題起して居るのであるが、之は待て、人相手に善し悪し言うてる限りいつ迄も切りがつかぬ。故に茲は人が如何にあらうが、

此方が人を悪く思ふ心さへ無くなつたらよからう』と。即ち、こゝで初めて自分の問題となつて來るのである。『歎異鈔』によしあしをあの如く言うてあるは、之れが我々の苦の本だからなのである。そこでその善し悪しが思ふ如く止まるか、止まらぬ。そこは我々自分の

思想上に超絶の考起すといふも、成る程然うするとよいと迄は分かるも、夫れが實際にはいかぬ。私これを隔て心と申して居るのである。それが如何にすれば止まるか、何うしても止まらぬ。止まらぬのは五分々々の人間の寄合ひだからなのである。即ち自分があの人悪いと思ふと、向ふも又それになりて何うし取れぬ、茲相對界の有様なのである。

一一 最後に望む所は唯一つ

そこで私思ふたには、『自分は斯く何うしても疑ひ隔ての取れぬ奴、故にいかぬが、哀れ願はくば私は斯ういふ性の奴、斯ういふ何處迄も疑ひ隔ての止まぬ性……』と、それは私の性分故

誰に向つてもこの性を出す。——それは私の始め苦しんだのは宗教界の事を刷新し度いと、それでやり出したのであるが、段々誰彼れに隔てがあるとなると、仕舞ひには關係の有る無しに係はらぬ、どんな人にも、——向ふが虚心坦懐て來らるゝ人にも、此方から疑ひ隔て、終に如何な虚心坦懐な人をも隔て疑はせて仕まふ自分である。故に自分のやうな者は捨てられて、もう逆も駄目となつたのである。すると

最後に私の望む處は唯一つ、『哀はれ世の中に誰か一人、斯く飽く迄隔て深さが私の性と、そこを理解し呉るゝ者は有るまいか。斯く何處迄も澁太さが私の性と、そこを理解して呉るゝ友人があつて、此方が如何に隔てやうが、我慢張らうが、それは君の性ぢや、分つて居る。それは君の性質と分つてる上は、如何に君の方からは隔てやうが僕の方からは隔てぬと、此方から我慢張れば我慢張る程、向ふからは益々我慢張らず、此方が疑へば疑ふ程、彌々同情を以て見て呉れる、然ういふ理解者があつたらよからう』と、

一二 人を呆れさす私

茲大抵の方に斯うとられて困るのである。それは世の中の者は皆ないかぬが、誰か本當に見て呉るゝ者は有るまいか』と、それなら天にいかぬのである。それは隔ては相手の如何にあるので無い。私の性にあるのである。茲は能く聞きわけて貰はなくしては。設し茲に如何程よき人があつても、私の性が隔ての性故、之でやるから皆な驚き呆れさせて仕まふのである。こゝは今から十四五年も前であるが、或文學趣味に長けた御

婦人、文學に耽溺して酔つたやうな有様になり、自ら絶えられずして、求めて來られたが、その方が信仰に入られた時の歌に

慕ひよる蝶をもたふす毒草に

なほさし添ふか天つ日の影

これはよい歌である。慕ひ寄る蝶をも仆す、これである。我々は疑ひ我慢が性分故、如何な同情て來る人も、この性分出されると、驚き逃げて仕まふのである。故に私の性が自分では逆も駄目ぢやとなつて仕まつたのである。故に

茲へ氣をつけて來ねばいかぬ。我々は人がいかぬくと、第一いかぬといつ迄も言うてる

その性がをかしいで無いかと申すのである。これは激しいけれども、こゝになつて來なくては自分の問題とならぬ。我々自分の問題は如何に苦しからうが、人に善し惡しの考がある限り、設え境遇を代えやうが、友人を代えやうが、周囲を代えやうが、何處迄行つても同じなのである。即ちこの考て何處迄も迷つて果てしの無いのを流轉輪廻と言ふ。私共一寸電車に乗る、人が横着な態

如何にやるも向ふは益々隔てず疑はず、『その隔てる性が哀はれ』と何處迄も優しく向はれる、向ふが絶対無我的人ならば如何な我慢の私も、その親切の前には頭が下らうと、私の友人が欲しくてならなかつたのである。これは私の思想の運びを申したのである。分りませうか。

も一度言ふと、我々世間が冷たい／＼と云うて居るのは、冷めたい自分が氷の性なのである。氷の冷い手で人を攫むから、人も冷め度くされて仕まふのである。氷なれば寄りつく程の者を冷さぬといふことは無い。

日光來りて『宜しい、何んなに氷があつても皆な引き受ける、如何程冷たからうが如何程氷が有らうが、氷の爲めに日光の冷えた例は無い。ある丈け皆な融かすが日光の働だ』と、氷の根底迄融かされて仕まへば、日光の前には融けて仕まつたも、他の物の前には残つて居るといふことは無い。一度日光に融かされて仕まへば、問題はそれで済んで仕まふのである。私が人に隔て、争ひ、何處迄も五分々々取り合つてゆくこの性分、

度任た、イヤな奴である。一寸人が退いて呉れた、あの人はよい人であると、これが何處迄も附いて廻はりて日夜善し惡しに五十年、終にこの世丈けて足らずして、次の生迄持つて行つて、『彼奴前の世に敵んだ奴だ』と、これが三界流轉といふことなのである。故にこの善し惡しの心は何處迄行つても止まぬ。止まればよろしきも止まらぬから困るのである。止まらぬは世間が皆な流轉同士の寄合ひであるからである。

一三 融けて仕まへば問題は消滅也

そこで斯く如何な善人も呆れ果て、虛心坦懐の人も呆れさすとすれば、それ程周圍に惡感化を及ぼす自分である。處て茲へ一人の人ありて、『宜しい、それは君の性ぢや、その性を同情した上は何んなことありても見捨てぬぞ。』處が此方はその性故なく／＼ハイと言は無い。『何んだ君子然として來やがつて』と此方は益々その性で向つて行く。向へば向ふ程彌々優しく向はれる。『變な奴だ』と益々我慢て向つて居る間は、即ち私の我慢て向ふの無我人を仆して居るのである。處が茲は、その先方の眞實が勝つか、私の我慢が勝つか。此方はこれを何處迄も温めて呉れる友人さへあれば、如何な私の性分も終には融けて仕まつて腹がふくれるだらうと、私の友人を捜したのである。而してその時には私もうそれが宗教であらうとは思はぬ。誰か人間に無いか／＼と求めたのである。

一四 聞法上の最惡癖

そこで私皆さんがお聞き下さる上の一番悪い所を一言する。皆さんが怒らずに聞いて頂き度い。この會館が出來て多くの人が集り下さるやうになつたのであるが、併しもとは一人々々聞きに來て下されたものである。この會館は西洋館であるも、併し斯ういふ建物が出来て、集りて聞く處といふ感じを興へたので、若しや皆さんの中に、寺院へ行く氣で來て居られる方はあらせぬかと申すのである。寧ろ腐つた學舎で一人々々聞いて頂いた時分の方が、本當に聞いて貰はれた。形は西洋館であるも、一般合ひに聞きに行く、寺院へ行く氣で來て下される傾向があつては、甚だ遺憾なことに思ふのである。ひどいやうであるけれども、私が苦しんだ時は何んな

新刊廣告

近角常觀著

慈光錄

求道叢書 第一編

定價八十五錢 郵稅四錢

●本書は「求道」第一卷及び第四卷に掲載せる著者が力作十一編を選びて収録刊行す

●蓋し一念徹底の信源より顯現し來る實際生活の内の風光を告白描寫せるものにして、著者が筆になるものとしては、これ迄に表はれたる中の最も心力を傾注せる文字なり

●猶ほ加賀國專光寺所藏親鸞聖人眞筆聖德太子二十句偈文を原本大コロタイブ版に附して冠頭に添付したり

●求道讀者諸君に限り御便利集金郵便の御注文に應ず

東京市本郷區森川町一
振替口座東京一六六九六番

求道發行所

求道第拾四卷第五號 大正七年三月八日第三種郵便物認可
振替口座東京一六六九六番 大正七年十月十五日發行(毎月一週十五日發行)

講 話

毎日曜午前九時 毎月十五日午前九時慶信會
毎土曜午後七時 毎月廿八日午後七時齋聖會

求道會館 (本郷區森川町一番地)

毎土曜午後二時

第一 求道會 (九段坂佛教俱樂部)

毎月二十七日午後七時

第三 求道會 (日本橋彌生町説教所)

毎日曜午前八時

日曜學校 (求道會館)

●本誌は毎月一回十五日發行とす。誌代は總て前金御拂込みのこと
●送金は成るべく振替にせられたし。郵便爲替の場合には振替局は本郷區森川町局宛のこと。郵券代用は一割増。宛名人は凡て求道發行所のこと

定價一部十四錢(六ヶ月分八十錢) 三ヶ月分壹圓五十錢(郵稅不要)

大正七年十月十二日印刷
大正七年十月十五日發行

發行所

求道發行所

電話(小石川一六四一番)振替(東京一六六九六番)

東京市本郷區森川町一番地
編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力